開会のあいさつ
－水害が起こらないようにと切に願って人柱を捧げた昔のひとびと－
(Opening address)

太田秀樹 [1]

1　中央大学　研究開発機構

概　　要

昔のひとがやったという人柱は，悲しくむごいおこないです。水害がおこると，家田畑を流された人たちの家族みんなが飢え死にすることも，あったのだろうと思います。もう，こんなことにはならないでほしい。神ほとけに祈る切なる願いが，人柱の背景にあります。本シンポジウムの開催にあたって，いまに伝わる「願いの歴史」をご紹介します。

キーワード：水害，人柱，破堤，歴史

1.　はじめに

地盤工学会関東支部歴史遺産委員会シンポジウム・講演会の開会にあたって，再破堤を防ぐために人柱を埋めた村の話をいたします。

滋賀県野洲郡中洲村立田（現在守山市立田町）で，実際にあったとお寺の記録に残っている話です。守山市立田町で育たれた河野伊一郎先生からお聞きした話から，ストーリーを始めさせて頂きます。

立田町では河野伊一郎先生が子供の頃，村の大人が相談して「この子（河野先生）を将来村長にしよう」と決めていたそうです。そういった大人たちの期待を裏切って河野先生は京大の先生になられ，最終的には岡山大学の学長になられました。（下の写真が河野先生）

滋賀県野洲郡中洲村立田の神社（現在守山市立田町）

河野伊一郎先生が
子供の頃
村の大人が相談して
河野先生を
将来村長にしようと決めていた

→

期待を裏切って京大の先生に
→
最終的には岡山大学長

河野先生によりますと，立田町には「ちりんさん」と呼ばれる小さな祠があります。滋賀県野洲郡中洲村立田という地名から分かるように，立田は滋賀県の東から西に向かって流れる野洲川が，琵琶湖の東岸に流れ込む河口デルタにある集落です。昔は河口が南流北流の二つに分かれており，南流北流に囲まれた中州のなかでも南流の北側直近に位置していた立田は洪水常習地であったのでしょう。

昔むかし，南流の右岸堤防（南流に沿って川の北側に続いている堤防・立田を南流から守っている堤防）が決壊し，立田が大被害を受けたのでしょう。洪水が余りにも多発したため，堤防が決壊した場所の近くに，人柱を埋めて堤防を作り直したとのことです。記録によると，天文 13 年（1544）戸田村（立田町）の庄屋奥野忠左衛門娘（16 歳）を人柱にしました。

娘の母親はそれを悲しんで，毎夜娘が埋められた堤防を訪れ，一人で毎夜泣いたとのことです。胸を痛めた村人は，現場の近くに小さな祠を建てたとのことです。祠は現在でも村人に守られており，お参りが続けられているようです。

この祠に向かって右側，20m ほど離れた場所に，川の堤防に並行して細長い池があります。「おっぽり」と呼ばれる破堤時の痕跡ではないかと思います。その更に右側に昔の南流の（右岸）堤防が残っています。南流北流には今は水が流れていません。南流北流の中間に 1 本の「本流」が開削され，現在はそれが野洲川河口となっています。

この堤防の下に，人柱となった娘さんの遺体があると思うと，毎夜ここで泣いたというお母さんの声が聞こえるような気になってきます。娘と母親にそれほどの犠牲を強いる強制力がどこから来ていたのか。気になります。よく聞くのは，「順番」です。「今度こういう事があったら，次はあなたの家が犠牲になるのですよ」という順番があらかじめ決められていて，イザその時になったら拒絶できない仕組みになっていることが多いと聞いています。中洲村立田の場合は，「くじ」で決められたと記録されているそうです。

1544 年といえば，関ケ原の戦いより 50 年以上前のことです。そんな昔の悲しみの記憶が今もはっきりと残っているようです。と言うのは，左の写真で河野先生が手にしている布には，人柱になった娘さんの家である「奥野家」の名前が書いてありました。庄屋奥野忠左衛門さんは，ご先祖に当たるのでしょうか。

上の写真は，現在の立田町周辺の景色です。平坦な土地と暴れやすい天井川野洲川の雰囲気を，お感じいただければ幸いです。下の写真は立田町の一時避難場所です。水防・防災の伝統が，今も深く根付いているように感じられます。

それでは，地盤工学会関東支部歴史遺産委員会シンポジウム・講演会を始めさせて頂きます。